

中国窯業技術の伝播二題

フィールド・ノートより

Two Cases of Technical Transmission of Chinese Ceramics:
from the Fieldwork Note

関口広次

はじめに

①「三叉トチ」などについて

②韓国の「雑釉」などについて

結語

【論文要旨】

窯業技術の先進国であった中国が、日本・韓国に伝播した窯業技術の事例を著者のフィールド・ノートから紹介、報告する内容である。中国から日本に直接もたらされた窯業技術として「三叉トチ」と俗称する碗・皿などの製品の重ね焼きする際に使用する窯道具がある。中国では北朝時代(6世紀)に青磁・白磁碗の重ね焼き用に使用されだす。唐時代の白磁・唐三彩を焼成した窯でも盛に活用される。中国の「三叉トチ」は上面は平滑で下面に三足がある形状を基本としている。三足を下の製品内底面にセットして、上面の平滑部に上の製品高台をのせて使う。日本では、9世紀以降、猿投窯址での灰釉・緑釉の碗・皿生産時、また周防・長門、京都、滋賀などでの緑釉碗・皿生産時に「三叉トチ」が利用されている。その形状はいずれも上下対象形で両面ともに3突起で支える形状で中国のそれとは少し違う。中国との国家的な交流の中から、窯業技術知識の大枠を学び、日本で創案して行ったものと想定した。

中国から韓国に直接技術伝播した窯業技術の一つとして、雑釉水筒壺を提示した。中国産の雑釉水筒壺は、韓国全羅南道新安で発見されたいわゆる新安沈没船や日本の伊万里湾鷹島沖の元寇沈没船から引き上げられたりしており、さらにこうした雑釉陶器を生産してきて、現在にまで残る「甕器店」の龍窯や代表的生産品である漬物甕蓋(盤)の成形方法が、南中国の窯業技術に源流を求められることを指摘した。